

研究

佐伯と国水田独歩

『春の鳥』より

会員 山本保

独歩は、作品「源叔父」を明治三十年八月文芸倶楽部に発表しました。(二十才) これは彼の最初の文壇的雜誌への投稿でした。

それから七年後の明治三十七年三月、「春の鳥」と女学世界に発表しました。三十四才の時です。

同年一月十九日、父は病歿し、同年二月一日、日露戦争が始まりました。

父の死に出会い、そして日露戦争一か月後に「春の鳥」を著わしていることは、興味深いこととす。

登場人物

① 教師——作者独歩

② 田口家の主人——下宿先、昔家老職の家柄

③ 六蔵——主人公、日齢、十一才

④ 六蔵の母親——田口の甥への妹、未亡人、四十五才

舞台は城山です。

作者が下宿している田口家(坂本永幸宅)の少年六蔵への愛情がにじみ込んでいると同時に、城山の情景が活写されています。登場人物には、フイクシヨウ(虚構)が織り込まれています。

作品の一部を抜粋いたします。ご鑑賞下さい。

(同かまづかいによる)

私は草を敷いて身を横たへ、数百年斧の入れたことのない鬱蒼たる深林の上を見越して、近郊の田園を望んで来た。さうして、幾度か解りませんでした。

或日曜の午後と覚えて居ます。時は秋の末で、大空は水の如く澄んで居ながら野分吹きすさんで城山は林は烈しく鳴って居ました。私は例の如く頂上に登って、や、西に傾いた日影の遠村近郊を明く染めて居るのを、見ながら、持った書物(注ワズワズ詩集)を讀んで、いますと、突然人の話声が聞えましたから、石垣(本丸跡)の端に出で下を見下しました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾って居るのを見た。風が烈しいので得物も多いがして、沢山背に負たま、樹の間に揺られて居る様子です。おつまじげに話しなから、樂しげに歌ひながら拾って居ます。それか何れも十二三、多分何村(注鶴岡村)あたりの農家の子供でしやう。

私は其頃下宿屋住(注月本旅館)で、何分不自由で困りますから色々々に頼んで、遂に田口(注坂本郎)といふ人の二階二間を借り、衣食一切の事を任すことにしました。

田口といふは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のまゝに構へて、有福に暮して居ましたので、此の二階を貸し私と世話して呉れたのは、少からず好意で在るのです。

六蔵は女かなか脱臼者で、悪戯を為するときは随分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で城山を駆廻る者ともなると、平地を歩くやうに、道のあるところ無い処、サツサと飛ぶのです。ですから従来も田口の者が六蔵は何処へ行つたかと心配して居ると昼飯を食つたまま出て、目の養老は戻らなかつた城山の野原に居る。

奥へはひなめより飛ぶより帰って来るのたそです。  
木拾ひの娘が六蔵の姿を見て逃げ出したのは、必定こ  
れまで鏡渡となく此自痴の腕白者に嚇されたものと、  
私も思ひ当つたのであります。……。

或日私は二人で城山に登りまゐりました。六蔵を伴れてと  
思ひましたが姿が見えなかつたものです。

冬ながら九州は暖國ゆゑ天氣さへ佳ければ極く暖か  
で、空気が澄んで居るし、山もぼろに日は却て冬が可い  
のです。

落葉を踏んで頂に達し例の天守台の下までゆくといふ  
寂々として満山声をき中に、何者が優い声で歌ぶのが  
聞えます。見ると天守台の石垣の角に六蔵が馬乗に跨  
がらうと両足をぶらぶら動かしながら、眼を遠く放つ  
て俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、昔の城趾、そして少年、まるで晝  
です。少年は天使です。此時私の眼には六蔵が自痴とい  
は如何しても見えませんでした。自痴と天使、何とい  
ふ差れな対照せしやう。しかし私は此時、自痴ながら  
も少年はやはり自然の児であるつくろひを感じました。  
高い木の頂上で百舌鳥が鳴いて居るのを見ると、六蔵  
は口をおんぐり開けて黙と眺めて居ます。そして百  
舌鳥の飛立ってゆく後姿を茫然と見送る様は、頗る妙  
で、この児童に自空を自由に飛ぶ鳥が余程不思議らし  
く思はれました。

天守台の上に出て、石垣の端から下までのぞいて行く  
うちに、北の最も高い角の真下に六蔵の死骸が落ちて  
居るのを発見しました。

六蔵は鳥のやうに空を翔け廻る積りで、石垣の角か  
ら身を躍らしたものと、私には思はれるのです。

耐震を築地の大塚作時と私は、  
そして六蔵のことを思ふといふは、  
思ひに堪へなかつたのです。人類と他の動物との相違、  
人類と自然との關係、生と死など、この問題が、年若  
私の心に深い痕を起しました。

石垣の上へ立って見て居ると、春の鳥は自在に飛ん  
で居ます。其一つは六蔵ではおれません。よし六蔵  
でないにせよ、六蔵は其鳥とどれたけ異つて居まし  
たらう。

或日のことでした。私は六蔵の新しい墓にお詣りす  
る積りで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先  
に未だ居て頼りと墓の周囲をぐるぐる廻りながら、何  
か独語を言つて居る様子です。

城山の森から一羽の鳥が翼をゆるやかに、二声三声  
鳴きながら飛んで、浜の方へ行くや、自痴の親は急に  
話を止めて、茫然と我を見送り見送つて居ました。  
この一羽の鳥と六蔵の母親が何と見えてしよう。

文章独歩の作品を批評するといふ大それたことばでき  
ません。

代わりに、或る評論家の「国木田独歩論」とを左に掲げ  
ます。

「春の鳥」は、ほとんど批判を純する傑作である。  
これは、独歩の中でも、じつうぶんに書きつくされ  
小説である。独歩には、甘さがある。感傷がある。甘  
さや感傷は、一步をあやまると文学をたいたなしにして  
しまふ。しかし、それを徹底すれば、「春の鳥」のよ  
きに失せんや力をもちつて文学が生み出されるのである。

「春の鳥」の方は何から来るのであろうか、大ていの  
 作品は、解説することのできる。しかし、この小説は  
 は、解説と拒む力がある。あらわれる人物は、自痴の  
 母親と、自痴の子である。この二人は、自痴であるが  
 中には、孤独なのである。左は、母親と子との間に  
 ほとんど他の人々とかかわりのないような愛情がある  
 しかし、子のほうは、それすら通じないほど孤独な  
 である。子は死によつて、常人のうかがい知ることので  
 きない世界に飛去つてしまふが、母は、いよいよ絶  
 望的な孤独におちいる。しかし、自痴であるがゆえに、  
 母親もまた、子の去つて行つた世界に生きながら通じ  
 ているように見える。この世界は、おそろしく意識の稀  
 薄な世界である。ふつうの人間とは無関係な世界であ  
 る。

しかし、そのかわららば、一人の普通人がいて。そ  
 れが語り手の美語、教養の教師であり、すなわち独歩  
 の詩魂である。

彼はここに、完璧といつてもよいエレジーを書き上  
 げた。「春の鳥」は、(イリスの詩人)に深く動かされた  
 青年時代の独歩の感傷の総決算であつた。この種の感  
 傷は、日本の文学にはあまりなかつたものである。仏  
 教の影響による因縁とか業とかの要素もなく、もちろ  
 ん、もののおわれなごといふ伝統とはほとんど関係が  
 ない。しかし、この詩の世界は永く弱れることを許さ  
 ない世界である。そして、何處も成功することがあり  
 えないう性質の材料である。

独歩の日記より

十一月十七日(明治二十六年)

昨日午後、收二と共に城山に登る。

城山の頂に城址あり。城址をた瓦垣を築すのみ。残墟  
 累々、秋草と灌木と蔓草と松風と紅葉と相交錯紛々たる  
 と見るなり。

自然は人間の歴史を顧みざるなり。か化は左右なす  
 んと欲するままた為すなり。人間はその間に生死浮沈  
 するなり。

今日午後、收二と共に城山に登る。

五月二十日(明治二十七年)

四五氏伴うて城山に登る。

夕陽まきに闇なり。小山、墨堂相重なり、蔭紫色に青  
 空は遠し。水流葉蕪の野を回流す。その美言語に絶す。

註

① 三の丸より右手に橋を渡つて通する登り路は所謂新道  
 で、独歩の当時はなく、大正の初め佐伯新青年同が奉仕作業で開  
 いた道路をさうです。

② 三の丸からまつた谷間をい上る旧道が現在もあつますが、  
 独歩はこの旧道を利用してたがひに城山に登りました。

③ 横川末吉先生(元佐伯中学校教頭)は次のように述べてい  
 す。(昭和二十四年版)

城山に登つて近郊を眺めると、まず夏草な三角洲  
 に驚きます。

女島、長島などは番正川の三角洲です。中江川(女島)  
 路久志川(長島)、長島川(長島)、その他今は大部分埋  
 められた白坪橋の下に川馬場の土手に沿うた昔の堀がは  
 三角洲に多い分、流れておぼろげに思ひます。しかしこれはい  
 洪水のたがひでできた三角洲であることを忘れてはいけません。

洪水のたがひの上流から流れてきた泥や砂が、なんかく堆  
 積されて川口の島を造りまゝ、長島や女島はへんに  
 東北に曲つていりてはありませんか。洪水のたがひの水が海山  
 へ出ると、地盤の裏の山にたまるから、それ長島や女島山  
 へはなれて東北に方向を改めるから、それ長島や女島山

へはなれて東北に方向を改めるから、それ長島や女島山  
 へはなれて東北に方向を改めるから、それ長島や女島山

へはなれて東北に方向を改めるから、それ長島や女島山  
 へはなれて東北に方向を改めるから、それ長島や女島山

へはなれて東北に方向を改めるから、それ長島や女島山  
 へはなれて東北に方向を改めるから、それ長島や女島山

③ 佐伯氏の「豊後」の作品の中で、城山を描いていますが、既に  
羽柴秋吉先生の佐伯史談集第三十六号で触れていますが、首略いたしま  
す。しかし、  
「佐伯の春巻(城山)は、夏先が城山にあり、秋又早く城山に來  
り、冬は、口を先づき、城山の林に多く也。」  
の文章が、口を先づきと口から口と口して出るほどです。

④ 三の地より頂上まで、そして水の手門より雄池、雄池を経て日  
浮の橋宮へ下る口には、徹夜には最通の土の道、特に初冬、厚  
苔葉とよく踏んでの故歩の格別であり、かほれ九のより  
です。

あとがき

昭和四十五年六月二十九日付大分合同新聞夕刊の記事  
を掲載させていただきます。(若干修正)

佐伯市は市内大手三三の丸公園に建設する佐伯市文  
化会館の設計を、東京の梓妻繁事務所の清田文永社長  
(佐伯市出身)に依頼して、大が、その設計図がこのほ  
ど、河市役所に届いた。

文化会館は、舞臺三階、地下一階、延べ四千五百平方  
メートル、三の丸公園に多つた旧鶴谷城跡のイメリジを取り  
入れて、会館正面に石かきを配し、階段になつた玄關  
入り口に高さ二十七メートルのシンボル塔を建てる。

また構造も、かつて佐伯湾に浮かんでいた船かげ船  
をかたどつたつくりにしてあり、全体のスタイルは、  
外を寺校。

地下は食堂、郷土資料室、一階は三百五十席の中ホ  
ールや会議室、結婚式場、事務室、二、三階は千三百席  
の大ホール。総工費約三億五千万円の二か年継続事業  
で十一月ごろ着工、来年秋に完成の予定。  
市は工事費の一部を一般の寄付に仰ぐほか、目下起

債目庫補助の獲得に力を尽せ、八の丸、(蔵書)の  
完成すれば佐伯市と南海郡部の文化センターとして  
利用する。(文化会館完成予想図の写真を添付してました。)

註

① 城山には、水丸、二丸、西出丸、北出丸、水の手門(雄池、雄池)  
などの遺構があり、頂上には独歩碑も建立されています。

② 三の丸には、黒門(三の丸橋門、第三段、毛利高政(高尚)の鳥居(旧  
藩時代に徳行神社、昭和初期にかけて、初代高政、八代高政と  
奉祀した毛利神社がありました)、城山還原の碑(保三位子  
爵(毛利)毛利高直撰(高直)高野(毛利)高政が朝鮮征伐よ  
り持ち帰られた不吉科の常御高木)、教育家野村越三先生胸  
像(大正十一年佐伯市出身彫刻家片岡彌太郎製作)、中根  
貞孝先生歌碑、古井戸などの文化財があります。  
また、歌年表、明治百年記念事業の一として、琴明亭  
公園(旧藩主涼台跡)が造られています。(かわり)

随想

西南の役西郷本営跡を訪ねて

賛助会員 高橋 智

去る九月二十日、雨の日向路に佐伯惟治公の遺跡を巡  
つた一行二十一名は、中井平一郎北川村長の御案内で、  
最後に西南役の戦跡である可愛島山麓の、北川村大字長  
井堂(佐伯)部落を訪れた。

この部落は、天孫瓊杵の御陵と称せられる古墳  
があり、その御陵の付近近くは、尊皇屋敷にトタンを張つ  
た農家がある。それが西郷隆盛が宿泊して、ここを本営  
とし、児王、魚太郎方である。この家、宮崎県指定史蹟で  
あり、長く保存するおまに北川村で買ひとり、中津より